

教育方針

2009. 12

溝口 勝

私の大学教育歴は、三重大学と東京大学と合わせて今年 12 月で 26 年目を迎える。この間、大学は組織・運営面で大きく変貌してきた。学生の考え方や価値観も変化してきた。少なくとも私が学生だった頃は、大学院に進学すること自体が、世間と一線を画して研究に埋没することを意味していた。しかし、今では多くの学生が義務教育の延長のような意識で大学院修士に進学してくる。さらには、高学歴と資格とを取り違えて、自分の専門を決めぬままモラトリアムの、あるいは学歴ロンダリング的に、博士課程に進学してくる学生もいる。前者は学生が自分の適性を判断できていないことを、後者は学生が依然として学歴コンプレックスを持ち続けていることを意味する。が、いずれにせよ、学生が一人前の大人として自立できていないことの表れである。

段階的教育論—まずは人間教育

学生は多種多様である。東京大学大学院農学生命科学研究科は大学院なので研究専門家を育成する使命を持っていることは当然である。しかし、良き研究者を育成する以前に、まずは自立した良き人間をつくるのが大切である。これは、必ずしも研究者を目指さずに大学院に進学してきた学生にとっても重要である。そこで、私は学生の成長過程に応じて、各段階で必要最低限の能力を身につけさせるよう柔軟に学生教育を進めたい。もちろん、既に各段階の教育目標を達成できている学生には次の段階の教育を進める。

駒場教育： 高校時代に身につけた競争に勝ち抜くことを是とする価値観から脱却させ、ナンバーoneでなくオンリーoneとして何ができそうなのか、自分の適性を見極めさせることに重点をおく。

農学部教育： 農学部生として、総合科学技術的な農学の基礎をしっかりと身につけさせる。たとえ農学と異なる分野に就職しようとも農学を熱く語る応援団になってもらえるよう学生と教員の接触の場を大切に、良い意味で“東大農学部卒のプライド”を持たせて卒業させる。

大学院修士課程教育： 他大学から入学する学生には改めて農学の総合性を理解させ、その上で将来自分の武器となりうるオンリーoneの研究に没頭させる。

大学院博士課程教育： 研究専門家として独自の研究に没頭させ、国際的に通用する人材に育て上げる。ただし、学生には PhD であることを常に意識させ、研究哲学に拘りをもつよう指導する。

ポスドク教育： 自分の身につけた専門をさらに深化させると共に、プロジェクト研究の中で自分の位置を俯瞰し、他分野の研究者とも議論ができるよう指導する。

女子学生教育： いまや日本女性は日本の未開拓資源として極めて重要であると思われる。積極性・緻密性・国際性等々、東大の女子学生の能力は男子学生よりも優れているように思う。彼女らが将来国際的に活躍できるよう、キャリア講演会や授業を通して女子学生の教育を積極的に応援したい。

東大生の教育論－逞しさを身につけさせる

大学の指導者は学生のタイプを的確に見抜き、それにあつたプログラムを用意し、学生の能力を最大限に伸ばすことが大切である。特に、基礎学力を身につけて優等生として入学した東京大学の学生は失敗の経験もないために傷つきやすい。こうした学生には、学部・大学院時代の講義・実習・研究を通してチャレンジする精神を植えつけ、たとえ失敗してもそれを乗り越えることのできる逞しさを身につけさせたい。その一方で、自立した学生に対しては、彼らが思い切り活動できる環境を提供し、自分の置かれている立場や使命を的確に把握し、様々な人々の協力の基に自分が存在するという謙虚な精神を持ちつつ、組織のリーダーとして活躍できるマネジメント能力を身につけさせたい。すなわち、特定分野の研究のみならず異分野の研究にも関心を持つことのできる研究者や、研究内容を正しく理解し評価できる行政官を育成したい。これこそが東京大学で教育研究に従事する者の責務であると考えている。

大学は教育機関－教授の背中を見せる

大学は教育機関である。確かに研究機関として研究を推進することも重要な役割であるが、研究の過程で人間を育てることなしに研究のみを推進するのは本末転倒である。私は、東京大学・大学院農学生命科学研究科に在籍する学生の多様性に留意し、彼らの性格と能力を最大限に尊重し、彼らと共に夢のある農学研究を進め、人間としても十分に尊敬できる研究者／社会人を育てたいと考えている。

昔であれば、学生は放っておいても、偉大と“信じていた”教授の背中を見ながら、自分もいつかはああいった研究をやってみたい、と憧れ、何とかもがきながら研究者として自立していったものである。しなしながら、大学法人化後、大学教員は研究以外の雑多な業務に日々追われ、学生との接触時間も少なくなってしまった。昔は教授と学生はもっと近い存在だったように思う。教授との会話の中で研究に対する取り組み方、研究者としてあるいは東大教授として世間との関わり方を学んだように思う。

最良の教育は、自分自身が学生の憧れの存在となることであろう。自分自身が何事に対しても真摯に取り組み、学生に自分の背中／生き様を見せられるよう自己研鑽したい。